



事業モニタリングでブーゲンビル自治州へ —ソハノ島で続く気候変動への挑戦

みなさんこんにちは！国際赤十字・赤新月社連盟（以下、IFRC）パプアニューギニア国事務所に派遣されている木本です！

今回、事業モニタリング評価の一環として、パプアニューギニアのブーゲンビル自治州の事業地を訪問しました。「地域主導型気候変動と女性保護対策事業」は、日本赤十字社の支援を受けてパプアニューギニア赤十字社が進める事業です。

青少年と女性を中心とした気候変動適応に関する研修や自然を活用した解決策とレジリエンスの強化など、地域でできる対策を地域住民が主導をとり一緒に考え、実際の行動につなげています。

主な活動として、環境保全の啓発活動や海岸の清掃、家庭菜園、マングローブ植林などに取り組んでいます。

ブーゲンビル自治州について

ブーゲンビル自治州は、パプアニューギニアのブーゲンビル島、ブカ島、その他の周辺の小島から成る州を指します。行政の中心はブカ島で、ブーゲンビル島の北側に位置し、両者はブカ海峡で隔てられています。ブーゲンビル自治州は海と森が近く、島々の景色が本当にきれいでした。首都ポートモレスビーと比べると、静かでゆったりとした雰囲気があり、治安も比較的安定していると現地のスタッフから聞きました。ただし、この地域にはブーゲンビル危機（紛争）の歴史があり、その影響は今も地域の暮らしや人間関係の中に残っています。



島の様子

赤十字運動と協力体制

今回の事業地訪問のための移動手段は、赤十字国際委員会（ICRC）の協力・サポートも受けました。事業実施地区までの移動手段の段取りや移動そのものが簡単ではない地域で、赤十字・赤新月のネットワークのつながりを移動の時間から体感しました。

実際に現場へ行き、声を聞くことができること。そして、そのための移動手段が確保されていること自体が、活動を成り立たせる大事な基盤なのだと改めて感じました。



ドライバーのマーティンさん

＊ブーゲンビル危機とは

1988年～1998年にパプアニューギニアのブーゲンビル島で起きた武力紛争です。主な背景には、巨大なバングナ銅鉱山をめぐる環境破壊、土地の権利、利益配分への不満があり、住民の独立運動が、ブーゲンビル革命軍とパプアニューギニア政府との武力衝突へと発展しました。紛争では1～2万人規模の住民が犠牲になったとされています。

1998年に停戦し、2001年のブーゲンビル和平協定により自治政府が発足。2019年の住民投票では、98%が独立を支持し、現在もパプアニューギニア政府との交渉が続いています。

出典：Bougainville crisis historical background (PNG Insight)

事業モニタリング評価 1日目：ソハノ島へ

初日はソハノ島を訪問しました。ブカ島からボートで10分ほどの小さな島で、約1,800人が暮らしているといわれています。さまざまな地域から移り住んできた人たちが構成されるコミュニティで、それが地域の意思決定の難しさにつながっているという話も聞きました。

モニタリングでは、島の人たちと意見交換を行うとともに、マングローブ植林エリアや浸水エリアなど、島の各所を案内してもらいました。

島には学校はありますが、医療施設はありません。生活の基盤が限られる中で、気候変動や衛生の課題が暮らしの脆弱さに直結していました。

衛生面では、家庭にトイレがないケースも多く、海で用を足すことが日常になっているとのことでした。住環境、健康、そして尊厳に関わる問題が、島の暮らしの中にありました。



島へ向かうボートにて



ソハノ島へ上陸

島では海面上昇の影響を大きく受けていました。

家の改築が必要になっている世帯があること、高潮期に水位が上がって土地が浸水しやすいこと、そういった話が次々出てきました。

居住エリアには流入した海水がたまり、流れ込んだゴミが散乱している場所もありました。

たまった海水で移動が難しい場面もあり、金属やガラスが混じる中、安全とは言い切れない環境でした。

「海面上昇は特に11～2月頃の高潮期に起こる」という話もありました。ニュースの中の話ではなく、毎年繰り返し経験する現実なのだ実感しました。



浸水エリアの説明を受ける



海水と共に流入した廃棄物



高潮対策のため高床式へ工事中の住居



浸水エリアの視察

住民主体で進む取り組み

今回のモニタリングで強く印象に残ったのは、赤十字で行った研修での学びが気候変動対策として生活の中で実践されているという点でした。

1) *マングローブ植林

女性グループ（アト・レディースなど）を中心に、マングローブの苗を集めて植林を続けています。研修後にリスクの高い場所を特定し、そこに植えることを決めたそうです。これまで事業によって植えたマングローブは約550本ですが、高潮の影響により多くが水に沈んでしまいました。実際に生き残っているのは15～20本ほどだといいます。それでも今年に入って再び苗を集め、植え直しているとのことでした。

ただ薪用にマングローブが伐採されることも続いており、植える人と壊してしまう人が同じ島にいるという葛藤もあります。知識だけの問題ではなく、暮らしや慣習、地域の合意形成の難しさが絡み合っていました。



伐採されたマングローブ



集められているマングローブの種



マングローブ植樹エリアの視察

4) 家庭菜園と食料安全保障

食料価格の上昇も話題に出ました。

市場で野菜を買う負担が増える中、家の周囲の限られた土地で野菜を育てることが、生活を支える手段になっています。

ただ、島の条件は簡単ではありません。

地下水位が高く土が安定しないため、外から土を運んでかさ上げし、肥料を工夫して土壌環境を保っているとのことでした。

育てているのは、キャベツ、豆、トマト、チリ、キャッサバ、バナナなど。肥料にはバナナの残渣を使っています。

研修では、肥料づくりや苗の育て方など実践的な内容が役立ったという声がありました。

家計の節約に直結し、家族の食卓に返ってくるからこそ、手応えを感じているようでした。

一方で課題も多いです。子どもや犬が荒らす、カニが苗を切る、忙しさで手入れが途切れると一気に枯れてしまう。カニの巣穴に対策したり、試行錯誤が続いていました。

2) リスクマッピング

リスクマッピングはとても役に立ったという声が何度も出ました。危険区域と安全地帯（高台）を確認し、地図を拡大して公の場に掲示したいという希望も出ていました。

昨年の小規模な津波警報の際には、実際に住民に声をかけて高台へ誘導した経験が語られました。

地図を作ることで避難の動きに直接つながっており、研修の価値が一番わかりやすく表れている部分だと思いました。

3) 環境保全：啓発、清掃、サンゴ植栽

環境保全の啓発活動は市場など人が集まる場所でも実施されており、若者、教会関係者、障がいのある人、15歳未満の子どもなど、多様な人たちが参加したと報告されました。

計画の段階から、地域の中で背景や立場の異なる人が関わることで、より幅広い声が反映された取り組みになっていました。

休日には清掃活動も行い、サンゴ植栽は地域の主要なメンバーを中心に継続されています。

うまくいかない部分も含めて、継続することが地域の強さになっていました。



家庭で育てられるバナナの木

* マングローブがなぜ大事なのか

マングローブは、高潮や波の力を弱め、海岸線を守る自然の防波堤として働きます。土の流出を防ぎ、沿岸の環境を安定させる役割もあります。また、魚など海の生き物のすみかにもなり、島の暮らしともつながっています。気候変動への適応策として、地域の生活を支える基盤のひとつです。しかしマングローブの木は薪木としても火の持ちがとてよいため、日々の生活のため伐採してしまう方も少なくないとのことでした。

課題として見えてきたこと

地域住民の方々やボランティアの方々の話を聞いていると、明るい話だけではなく、現場で直面している課題が率直に出てくるのが印象的でした。

住民の中には環境保全に無関心な人や「自然に任せておけばよい」という人もいて、植えた苗木が掘り返されてしまうこともあるため、継続的な啓発活動が欠かせない状況が続いています。

人手が十分に集まらず、実際に動くのはごく限られた少人数にとどまっていること、地域内での協力体制が弱く、リーダーシップ不足が計画の実行を妨げていること、

また「参加するなら手当が必要」という意識が根強く、活動を続ける上での障壁になっているという声もありました。



地域の方々とのグループディスカッション



地域の方々とのグループディスカッション

地元料理に感じた、島の温かさ

昼には、地域住民の方々が地元料理を振る舞って下さいました。

私の地元である愛媛でもなじみのある鯛の塩焼きや、島で採れたてのココナッツジュースまで用意して下さっていました。訪問者として迎え入れてくれる温かさがある、その食事の時間が島の雰囲気そのままを表しているように感じました。



地元料理



採れたてのココナッツミルク

住民の声：暮らしの中から出てきた言葉

意見交換のあと、ソハノ島の二人の女性から話を伺いました。気候変動対策が環境問題にとどまらず、災害時の行動や家族の安全、次世代への責任と深く結びついて語られていたことが印象的でした。2000年から暮らすジョイスさんは、災害時に「いつ・どう・どこへ移動するか」を知ることの大切さを強調し、次の世代に知識を伝える必要性を話してくれました。

自分たちの行動が環境悪化につながっていることも認めつつ、「島は脆弱で放置できない」と、住民の主体性や情報共有の重要性、そして気候変動の影響に負けない暮らしを築いていきたいとも話していました。

2012年から暮らすアイリンさんは、母親として家族と地域の安全を守るために行動する必要があると話し、若者を含む住民に影響を理解してほしいと強く訴えていました。

以前は木やマングローブが多く沿岸が豊かだったが、今は資源採取によって環境が悪化しているという変化を、自分の目で見てきたと話してくれました。

お二人の言葉には、住民が実感している危機と、未来への思いがよく表れていました。



ジョイスさん

アイリンさん



インタビューを受けるお二人

現地で活動する赤十字ボランティアの紹介

現場で特に存在感があったのが、赤十字ボランティアのロンダさんです。ソハノ島における本事業の主要実施者として、地域の活動を支えています。ロンダさんは2023年にパプアニューギニア赤十字社のボランティアになりました。ブーゲンビル危機後に赤十字が地域全体で重要な役割を果たしてきた姿を見て、自分もその一員になりたいと思ったのがきっかけだったといいます。活動の中で大切にしているのは「自立」だと話していました。苗を購入するだけでなく、他の島から苗を集めて自分たちで育苗も行っています。資金を待つのではなく、自分たちでできることを続けようとしていました。高潮でほとんどが水に沈んでしまった状況でも、諦めずに再挑戦を始めています。昨年9月から種の収集を開始し、現在は約100本を育苗中です。今年7月までに2,000本の苗を準備して再植林することを目標にしています。住民の意識の変化も感じているといいます。苗の集め方や植え方を自分たちで理解し始め、学校から啓発活動の依頼が来るようになったとのことでした。ソハノの未来についてこう話してくれました。「私の目標は、島の周りに2,000本以上のマングローブが育っていること。そして、海面上昇に対して何らかの解決策が見つかることです。」厳しい現実の中でも、ロンダさんは前向きに取り組んでいました。



ロンダさん



おわりに

ソハノ島では、海面上昇が人々の暮らしに影響している現実を、実際に目にしました。

浸水したエリアを歩きながら、ニュースで見ていた話が、ここでは毎年繰り返される日常なのだと実感しました。

課題はたくさんあります。マングローブは高潮で流され、人手は集まらず、活動を続けることの難しさも見えました。

それでも、できることを探しながら動き続けている人たちがいました。その姿が、一番印象に残っています。

日本赤十字社の支えが、遠く離れたこの島での活動にもつながっていることを、今回の訪問で改めて感じました。

2日目はハク地域を訪問しました。続きは次号でお伝えします。



住民の方々と



みんなで集合写真